

篝火灯る能舞台 夏の夜を包む幽玄の世界—



火入式役
中嶋 春香さん(21)

小学1年生の時に子ども能楽教室に参加し、高校3年まで安曇野で能を学びました。現在は伝統文化をさらに学ぶために京都の大学に通いながら青木先生のもと稽古に励んでいます。8年ぶりにこの舞台を見て、本当に素晴らしい舞台だということを実感しました。子どもの頃からあこがれてきた火入式役として戻ってこれることができ、言葉にしきれないほどの喜びを感じています。支えてくれる皆さんに感謝しながら、今度は私が子どもたちに夢をあたえられたら嬉しいです。



主宰
青木 道喜さん(72)

明科生まれの父が、故郷に恩返しをと始めた薪能。8年ぶりに再び明科の地で、そして屋外での開催ということもあり、緊張しつつも大変嬉しく思っています。薪能は明科地域に根付いており、明科の土地柄・色気といったロケーションを生かしたイベントとして、安曇野の誇る魅力発信の一つとして今後も続いていくことを願います。薪能の良さを味わってもらえる舞台を続けていきたいと思ひます。



第32回 信州安曇野薪能が8月19日(土)に龍門湖公園で開かれました。公園隣の明科南認定こども園の建設工事や新型コロナウイルスの影響で、薪能として屋外での開催は8年ぶり。開演の前には、稽古を重ねてきた子どもたちによる仕舞が披露されました。直後の豪雨により、約2時間の中断となりましたが、参加者460人が薪の炎がゆらめく晩夏の夜の舞台で能の世界を楽しみました。

開演前には、篝火に火を入れる「火入れ式」が太田市長らにより行われました。子ども能で学んだ中嶋春香さんが先導を務め、薪能の幕を開けました。演目は、舞囃子「高砂」で始まり、能「半部」、狂言「棒縛」、能「善界」が主宰の青木道喜さんのほか一線で活躍する能役者により披露されました。

また、地域の市民などから作るボランティア79人が朝から準備や運営などを行いました。8年ぶりの開催を支える姿が見られました。



8年ぶりの篝火 晩夏の夜に灯る

信州安曇野薪能

第32回

